

# 教材研究 『羅生門』

## 教科書の注記を中心として

甲 斐 睦 朗

はじめに

教材研究における教材とは一体何であるうか。一般には、教科書に載る小単元の作品あるいは文章を教材とする。たとえば、文学教材「羅生門」を取り上げると、教科書には芥川龍之介の作品「羅生門」の全文が載せられているのであるから、教科書を離れて全集本や作品集（文庫本など）などで教材研究ができるという見方が普通である。そして、作品の文学性、表現上の特徴などを調べるにはその見方でも通用する。

ところが、教室で扱うときの教材「羅生門」は芥川作品「羅生門」ではない。それはまず、歴史的仮名づかいを現代仮名づかいに改めたとか、送りがなを付加したとか漢字表現を仮名に改めたという表記上の違いがあるからであり、次に、教科書には、本文以外に注記、作者概説、教材末設問、あえて加えればさし絵や写真もが付け加わっているからである。

従って教材研究というものはそれら本文、注記などを総合した教材を研究するものでなければならぬが、どうも作品論に重きが置かれていた現状では、本文を含めた教材そのものが逆にながしにされている感がある。たとえば極端なものを例に取って、作者概説の欄に掲げられる作者の写真を取りあげても、その写真の感じが神経質そうで眼光鋭くギスギスしたものであるか、あるいはやわらかい感じであるかによって、学習者の対作品観が出发点において異なってくるし、同様にそこから、作者概説でどうしても述べなければならぬものは何かという問題も考える必要が生じてくるのである。

現行の教科書は一面ではことばに関する単元に力を注ぎ、巻末付録にもことばのきまりなどに十分なスペースを提供していながら、他面、文学教材などでもつばら、いわゆる文学性に重きが置かれ、ことばに対する配慮が欠けているように思われる。私はそれをまず教科書の本文表記において確認することから出発し、後に述べるよ

うな論を立てて順次検討を加えている。

ところで、芥川の「羅生門」が現行の教科書の何種に採られているか確認できていない。そこで、ここでは入手し得えた次の三種の教科書の比較・対照にとどまった。

① 新編現代国語改訂版1 三省堂

② 現代国語二訂版1 筑摩書房

③ 現代国語改訂版1 中央図書

なお、昭和四十八年度版では、明治書院版、旺文社版、第一学習社版にも「羅生門」が採られているが、その三種はここではあえて取り上げなかった。しかし、本文表記にしても、注記や設問のあり方にしても、現行のものとはほとんど変わりがない、中には改善されているものもあるということは、今後、問題にしなければならぬ。

さて、私の「教材研究「羅生門」」は次の構成になっており、ここに述べるのはその「二」の注記についての部分である。

一 教科書の本文について 1句読点の付加・削除 2本文表記  
(漢字とかな) 3誤読・誤植その他

二 教科書の注記について

三 教科書の教材末設問について

四 教科書の作者概説について

五 「羅生門」の表現について 1格助詞「に」「で」「へ」 2

陳述の副詞 3接続詞と指示表現 4文末表現 5譬喩表現 6改作の跡付けとその意味

六 「羅生門」指導案

以上のうち、「一」は「長田国語」第五号(兵庫県立長田高等学校

国語科機関紙)に載せさせていただいた。参照していただければ幸いである。また残りの部分も順次機会を見て発表してゆく予定である。

## 1 注記の形式と数量

「羅生門」の注記がどのようになっていくかを、上述の三種の教科書で見ると、まずは形式であるが、筑摩書房版(以下㊦)と略記する)は頭注形式で、三省堂版(以下㊧)と略記する)は見開き二ページ分の注を左ページの端にまとめる、いわゆる補注形式であり、中央図書版(以下㊨)と略記する)は脚注形式である。㊦は頭注欄に見出し語を掲げ、㊧と㊨は本文の該当語句に番号を施し、注欄にはその番号を記して見出し語は掲げていない。㊦はまたさし絵も脚注欄に付載するというように、それぞれ本文の読みやすさ、注記の検索の便利さに趣向を凝らしている。しかし、そこに扱われる注記の項目は逆にかなりのものが共通しているのである。教材研究が進んでいけば、何を注記するかで、各種ともに共通することもあるうし、逆に、十分な教材研究ができていなくても、踏襲・追従というかたちで共通することもある。そして、取り上げた項目が十分な検討の上のことなのか、あるいは単なる模倣なのかは容易に判断することができない。「羅生門」が教科書に載せられてから長い歴史があり、その歴史における注記のあり方を跡付けることは、一面では「羅生門」をいかに読んできたかの證左にはなるとしても、資料などの点で困難さを伴うからである。そこで、その一大集成とも言うべき「近代文学 芥川龍之介」(吉田精一氏編著、有精堂 昭和三十八年五月刊)の詳細な頭注・補注を参照しながら以下の検討を進めたい。

さて、三種の教科書で取り上げた注記の用例数は全部で三十五例で、うち㊦が三十二例でいちばん多く、次に㊧の二十二例、そして㊨が二十例である。三種の教科書が共通して取り上げているものが十五例、二種で取り上げているもの十例（うち、㊦と㊨が五、㊧と㊣が四、㊩と㊤が一）、一種が取り上げているもの十例（うち㊦八、㊣二）である。つまり、㊨は、注記に取り上げた用例数も少ないし、独自の用例が一例もない、逆に㊦は用例数も多く、独自の用例も多いという対照的な注記になっているのである。

## 2 三種ともに取り上げた項目

三種の教科書が共通して取り上げている用例は、

- ①羅生門 ②市女笠 ③揉鳥帽子 ④旧記（二例あるうちの前者）  
⑤鷗尾 ⑥襖 ⑦申の刻下がり（㊨は「申の刻」か） ⑧火桶 ⑨山吹の汗疹 ⑩聖柄（㊦は「聖柄の太刀」） ⑪檜皮色 ⑫髻 ⑬檢非違使の庁（㊣は「檢非違使」） ⑭太刀帯の陣 ⑮黒洞々たる（㊦は「黒洞々たる夜」の十五例である）。

これらの注記には、たとえば「羅生門」や「鷗尾」、あるいは「襖」などのように、説明に長短の違いがあってもその内容が大同小異であるものが多いので、ここでは、問題のあるもの、特徴の見られるものに限定して取り上げてみたい。

### ③の「揉鳥帽子」は、

㊦柔らかにもんでしわのある鳥帽子。貴族や有位の男子が平常服の際にかぶった。ここではそれをかぶった男。

㊨柔らかない鳥帽子で、上流の男性が用いたもの。ここではその着用者の意。

㊣かぶとの下にかぶる鳥帽子。（横にさし絵が付けられている。甲斐注）

と説明されている。㊦と㊨にある「ここではそれをかぶった男。」などの説明は親切である。ただ㊩の場合、その着用者が「上流の男性」に限定されてしまうので、「一体そういう「上流の男性」（「市女笠」の注記でも同様に「上流の女性」ということになる。）が羅生門に雨やどりするかという疑問が生じるような説明になっている。㊣の注記も不十分で、「本来かぶとの下にかぶったもの」（「教授資料」）の方がわかりやすい。以上のように、三種の教科書における「揉鳥帽子」の注記を見ても、「揉鳥帽子」を注で取り上げるという点では一致しながらも、その説明がいかに相違していることか。そして、学習者はそれらを対照させてみる事ができず、また、大体注記のあるものについては改めて辞書を引かないという傾向がある、という意味において、疑問を感じるのである。注記におけるこの違いは、単に「揉鳥帽子」や「市女笠」に限ったことではなく、先述の大同小異とした事項にも見られるものである。しかし、ここでは大きな違いのあるものに限定して先へ進まなければならない。

⑦の「申の刻下がり」は、

㊦ 午後四時すぎ。

㊨ 現在の午後三時から五時に当たる時刻。

㊣ 午後五時すぎ。

と説明されている。この注記から判断すると、㊨は「申の刻」の説明をしているように思われる。このわかりにくさは、すでに述べたように、㊦が頭注の欄に見出し語を掲げているのに、㊩と㊣が、本文に施した注記番号を、注記の欄に記すだけで、見出し語を掲げて

いないことよつてゐる。㉔の場合は本文に注記番号を付けていないために、せつかくある注記を見落すことになりかねないというおそれがあるが、㉓と㉔の場合は見出し語がないために、この「申の刻下がり」のような用例の場合には一体どの部分の注記なのかわかりにくいという欠点があるのである。それに、見出し語を掲げた場合は、一続きの単位で提示することになるので（たとえば、㉓と㉔が「聖柄」であるのに㉔は「聖柄の太刀」であるし、「黒洞々たる夜」もしかり）、学習者には見出し語付きの方が理解しやすくなる。

さて、「申の刻下がり」についての右の注記のうち、㉔「午後四時過ぎ」、㉕「午後五時すぎ」と時刻に相違が見られるが、どちらが適当なのであろうか。㉓の「教授資料」には、「現在の午後四時過ぎ」ということ。」とまず説明されていて、教科書の注記と一致していない。教科書の注記と指導者の説明のくい違ふことはときどきあるが、その場合、後で書かれる指導者にその旨の断わりのことばがほしいものである。さて㉓の「教授資料」ではその続きに、「いうまでもなく、古典的な雰囲気を作り出すための表現である」云々と説明が続いているが、そこから判断すると、そういう「古典的な雰囲気を作り出すための表現」に重きがあつて、時間の方はたいした問題ではないのであろうか。

ところで、昔の時刻についての解釈に、たとえば「申の刻」では、午後四時を起点としてそれから二時間という説と、㉓のように、午後四時を中心として、その前後する二時間とする説の二つがある。前者なら午後四時から午後六時までで、後者なら午後三時から午後五時までである。その二説のうちのいずれが正しいのか私にはわか

らないついでにもう一つ付け加えると、現代では、たとえば午後四時というとき、何も午後四時台、つまり正四時からの一時間をさすのではなく、針が四時ちようどをさしている時刻を意味するのには、どうして「申の刻」が「台」を意味するのであろうか。どうもその理由の一つに、「申の刻」の「刻」に対する解釈の幅があるように思われる。先述の㉓「現代の午後三時から五時に当たる時刻。」における「時刻」という語の用い方はその一例である。「時刻」は「時間」の意ではあつても、「時間」の「間」の意味が含まれていないように思われるがいかであらうか。

「申の刻」が「台」を意味しないのであれば、「申の刻」の中心時（前説では起点時、後説では中間時）が午後四時であるから、「申の刻下がり」は午後四時すぎになる。

㉔が「午後五時すぎ」としたのは、「申の刻」を「台」で解釈し、「申の刻」台をやや経過した、ということであらうか。これは後説での判断である。というのは前説における午後五時は中間時ではあつても意味をなさない。そして、後説によつて「申の刻」台をややすぎたのであれば、もう「酉の刻」台にはいつてしまつてゐるのである。

教師用指導書にはそういう基礎的な知識を説明してほしい。現場の教員が普段ごく常識的なこととして見過ごしているような事項の説明がほしいのである。「古典的な雰囲気を作り出すための表現」という文学的側面からの説明も必要であるが、そういう面だけをおさえても、国語教育の立場からは片手落ちの結果になつてしまう。教室での読みがそれに従えば、学習者の問題意識も「申の刻下がり」そのものにははたらかない結果になり、従つて、下人は一体どれぐ

らしいの間雨やみを待っていたのかという問題意識を起こしにくいことになるのである。

「申の刻下がり」は、「羅生門」における主人公下人の思惟にかかわる時刻の提示でもあるから、今の午後四時過ぎということも明確に把握させる必要があるのである。

次に、⑧の「火桶」を見よう。

⑧ 木をくりぬいて作った火ばち。

⑨ 円形の火鉢をいう。

⑩ 内を金属性のもので張った木製の火鉢。

三者ともにおおよその形がわかるようには説明されているが、いづれも完全ではない。⑨の説明を取り上げると、「火桶」はたしかに「円形の火鉢」ではあるが、何も「円形の火鉢」のすべてが「火桶」ではない。「木で作った」という属性は「桶」からすぐに判断されることではあっても、一般の概念の「桶」と「火桶」はその作り方が異なっている。そして⑩の「内を金属性のもので張った」上質の、上流の人の用いる「火桶」があつたにしても、単に「木をくりぬいて作った」のもあつたらうし、しかもこの場合は下人の視座で想起される「火桶」なのである。どうも、「火桶」の正解はこれら三者を総合したところに求めることができるようである。

注記というものはこういうものでいいのであろうか。この場合、「火桶」のおおよそが理解できるのであるが、「羅生門」を読んでゆく上からはそれでもよい。しかし、注記を注記として見るときに物足りなさを感じ、注記学とは言わなくても、もつと注記のありようについての明確な理論ないし方針が望まれるのである。

次に、十五用例のほとんどが歴史的な事項である中で、一例だけ

抽象的内容である「黒洞々たる(夜)」を見てみよう。

⑪ 底知れぬほら穴のような暗黒な夜。

⑫ まつくらで、ほら穴のような。

⑬ まつ暗やみ。

「近代文学 芥川龍之介」の頭注には「ほら穴のように暗黒な夜」云とある。それで、あるいは、⑪と⑫はそれを受けているのかもれない。「ほらあな(洞穴)のように真黒な状態をいう。ここで、「黒洞々たる夜」は、人生の象徴としてもいわれる表現である。」

⑬の「教授用資料」の「洞々たる」は譬喩的表現であるようにも取れ、⑩の「まつ暗やみ、および「闇の深いさまをあらわす。洞々は「うつろ」とか「底の深い」とかをあらわす語。」(「教授資料」と対照的である。⑪と⑫の注記の是非については、⑪の「学習指導の研究」に、「全くの暗黒の夜。字音三語が効果的。『洞々』は本来、まじめ、まことの意で、『洞』が「つらぬきとおす」の意をもつことからきている。黒一色、ただただ真黒な、暗黒の夜、の意となろう。『ほら穴のように暗黒な夜』(前掲書)ともされるが、『洞々』にそうした用例があるかどうかは未見。」云々と記されている。

「大漢和辞典」によると、「洞洞」には「黒いさま」の意があり、「黒洞洞」の用例を「水滸伝」から示している。ここから判断すると、⑩の「まつ暗やみ」がよくわかるし、また、⑪の「学習指導の研究」の説明がよく納得される。そしてその結果、⑬と⑫の注記が浮いてしまうのである。

次に④「旧記」を、「旧記の記者の語を借りれば」(2の⑫)と合わせて考えてみたい。

③の注記には、

④ ここでは「方丈記」のこと。

⑤ ここでは「今昔物語集」のこと。

と説明されている。このように、作者が「旧記」と表現したものを、一つ一つ「ここでは「方丈記」のこと。」というように説明する必要があるかどうか。これはどのような配慮に基づいた注記なのであるうか。それを少し考えてみたい。

作者は「今昔物語集」の説話を基にして「羅生門」を書いた。このことは、教室で「羅生門」を読むにどのような意味を持つているのか。その一つの答えが、「芥川の「羅生門」と、その典故となっている「今昔物語」の説話とを比較し、作者の創作意図について考えさせてみる。」という、③の「学習指導の実例」における「学習活動」の事項であろう。これは「羅生門」学者の「まとめ」として位置づけられている「作品の主題について話し合わせる」の具体的内容として示されているもので、そのための「指導上の留意点」として、「今昔物語」巻二十九の中の第十八及び、巻三十一の中の第三十一をプリントして渡しておく。ことが必要なのである

(以上③の「教授用資料」による)。——最近の学校における一大改革は印刷機器の導入である。その該当説話を記した「教授用資料」から、わずか二、三の手続きで大冊のわら半紙に写し取れ、容易に学習者に配布することができるようになった。

ところで、太宰治の「瘤取り」でも、「学習の手引き」の第一問が、「この作品を、諸君が幼いころに知った「瘤取り」の話と比較してみよう。できれば「宇治拾遺物語」の中の「瘤取り」の話とも比較してみよう。」(明治書院版)である。この設問では、おとぎば

なしの「こぶとりじいさん」も「宇治拾遺物語」の中の「鬼ニ痲被」取事」も一括して「瘤取り」の話」なる名称にする荒っぽさがあるが、それはさておき、こういう比較の設問には二つの大きな問題点があるのである。

その一つは、「羅生門」にしても「瘤取り」にしても、あるいは「鼻」にしても、いずれも一年生の一学期中頃に扱う教材として配置されているのに、一体両者を比較できるほどに一年生は古文を読めるのであろうかという問題である。その点「できれば」は逃げ口上の手段にもなれるから曲者である。

少し余談になるが、すでに定時制に勤めて五年目になる私などは、古典の時間が、上学年に二単位しかないので、教科書の設問に当惑することがときどきある。例えば現代国語一年用の短歌教材に、「連体止めの歌はどれか」という設問が載り——それは係助詞の用法を学習しなければ答えられない。歌の理解、鑑賞には直接のかわりがないが、生徒に与える不安・衝撃が強い——そこから、現代国語の教科書が全日制定時制共通のものであるのに、いかに全日制(それも普通科)中心に作成されているかを痛感するのである。

さて、「羅生門」と、その典故となった説話の比較が、単にきりぎりすやにきびなどの有無を知るということぐらいのものであれば、古典の入門を受けている者には可能であろう。ところが、③の「教授用資料」には、両者を比較してみると、かなり明確に「羅生門」の主題がとらえられるのではないかという意味のことが書かれているが、それは一年生の古文読解力無視の上に立つ論であるし、他方、国文科出身の者に自然に養われた発想法によつて思うように思われるのである。それが第二の問題点である。

「羅生門」の基になった「今昔物語集」の説話を、ある指導書では「原文」とよぶが、「原文」などというのと、あたかも芥川がそれを翻案したように聞こえる。芥川の「今昔物語集」に対する態度は単なる素材意識——時代とか場面の利用——であろう。われわれは芥川の「羅生門」を読めばいいし、またそれを独立した作品として読まなければならない。

ところが、日本文学の伝統の中には、いわゆる本歌取りのものがあった。和歌における本歌取りは言うに及ばず、物語においても謡曲においても、そして近世の作品においても地の文や詞に先行作品を引き、その持つ意味・情趣で作品の豊かさ、深みをはかった。従って読者はそういった本歌取りの読みをする習慣がついた。たとえば西鶴の作品において、古歌や先行作品を踏まえた表現を理解しなければ、鑑賞はおろか読解もできないのである。現代人——とりわけ国文科出身の者——は、自然にそういう見方を養っているものだから、「羅生門」に対しても同じような見方——つまり、芥川の「羅生門」を理解するには、その基になった説話を理解する必要があるという受取り方をしてしまうのである。芥川が人間のエゴを追求するのに、それに適した説話を利用したという、近代小説の技法はその見方においては無視されているし、また、本歌取りの読みには、先にまず先行作品を十分に理解しておくことが前提とも条件ともなるのに、このやり方では逆の順序になっているのである。

③の「ここでは「方丈記」のこと。が、「羅生門」の説解に必要なのか、注記として適当なのかは検討しなければならぬ。この注記が高校生の読解の力添えになるというよりも、むしろ正当な読解を中絶させ、異なる方向へ興味を動かすことになりかねないからで

ある。「方丈記」「今昔物語集」と明記することによって、日本の古典文学への誘いができる」と編集者が考えたのかもしれない。あるいはそういう案内としての役目を果たしているかもしれないが、単なる知識として受け入れるという表面的な結果に陥いることにもなりかねない。そして、その注記が、「羅生門」創作の過程には触れ得ても、逆に、(原文↓翻案)の印象を与えるか、「今昔物語集」などの説話に対するゆがんだ印象を与えるからである。つまり、かに②の「学習活動」に従って、「羅生門」の主題を捉えるために、注記掲げられた説話を対置させるとすれば、「羅生門」では、下人を最初から盗人には設定していないということを強調するために、逆にその説話の独自の文学性をそこなうことにならないかという疑いが生じるのである。いずれにしても、この二つの作品の独自の文学性を尊重するかたちでは③の「学習活動」は困難であろう。そして③の注記はそれと密接な関係にあるのである。

以上、③の注記から生じる疑点を述べてきたが、④には、  
④ 古い記録。素材となった「今昔物語集」(一二世紀初めごろ)などをさすが、このことは「方丈記」(一二二二)に出ている。

⑤ 「今昔物語集」をさす。

とある。その⑤の注記は③に同じであるから、ここでは④だけを取り上げたい。「旧記」をまず「古い記録」と説明する。これだけで十分である。ところがその続きにある説明が誤解を招く表現になっている。「今昔物語集」(一二世紀初め)などをさすの「など」には、「宇治拾遺物語」や「十訓抄」など説話文学系の作品が意味されているのであろう。つまり、「旧記」というのは、「今昔物語集」など説話文学系の作品をさす語だが、このことは「方丈記」に

出ている、という説明であるから、この注記は、「方丈記」に出ていることを作者はあたかも「今昔物語集」などに出ているように表現した、とか、「今昔物語集」などを意味する「旧記」という語を「作者は「方丈記」に用いた、というように解せられるのである。もちろんこれは曲解であるが、大体学習者の受け取り方は千差万別で、書き手の期待通りとはいかないものであるから、教科書の注記の文章としてはあいますぎるのである。

最後に㉞の注記を見ると、

④古い記録。鴨長明の「方丈記」に、一一八一年ごろの打ちつづく災難のこと、そのために仏像などをたきぎにして売ったということが書かれている。

とある。㉝の注記はない。㉓と㉔が単なる出典の作品名提示に終わっているのに対して、㉞は、「方丈記」における該当箇所を要約紹介することによって、「羅生門」の読解に役立てようとする注記になっている。

なお、㉞のこの注記は「近代文学 芥川龍之介」の「補注二」の説明の前半を受け継いだものである。このように、「羅生門」の読解に役立ち、「方丈記」の正当な紹介になっている注記を受け継ぐことは、つまり他の教科書の注記を慎重な検討の上で踏襲することは今後も大いに望ましいことであろう。そうすることによって「羅生門」の注記がより充実してゆくように思われるからである。なお、この注記と同様の見識を示すものとして、前掲書の「頭身の毛も太る」(同書五ページ頭注九)の説明がある。それは次の節で述べたい。

### 3 二種で取り上げた項目

二種の教科書で取り上げている語句は、

- ⑮ きりぎりす ⑰ Sentimentalism ⑱ 築土 ⑲ 疫病 ⑳ 引剝  
㉑ 朱雀大路 ㉒ 辻風 ㉓ 頭身の毛も太る ㉔ ひき(藁) ㉕ 旧記(二例のうちの後者)

の十例で、⑮が㉒と⑳、㉑と㉔が㉞と㉔で取り上げられている。㉓は㉑の「朱雀大路」を①「羅生門」の注記に含めて説明しているので、二種で取り上げているのは厳密には九例ということになる。

⑮「きりぎりす」の注記は、㉞「こおろぎ」、㉓「こおろぎ」のこと。で、これは、古くは、現在の「きりぎりす」と「こおろぎ」の呼び名が逆になっていたということによっている。そして㉔が注記していないのは、この「きりぎりす」をそのままのきりぎりすとしたからである。昭和四十八年度版のある新しい教科書の指導書には、現在の「こおろぎ」が円柱にとまれるか、とまったとしても「こおろぎ」ではしっくりしないという意味のことが書かれているから、㉔も同じ見方であるのかも知れない。「こおろぎ」が円柱にとまるかどうか知らないが、作者が「蟋蟀せりぎりす」を「こおろぎ」の意味で用いたであろうことは十分に考えられよう。つまり、「こおろぎ」の習性という事実よりも、古名の「きりぎりす」は「こおろぎ」の通称という知識の方に作者の興味があった、作者にはそういう傾向があると推察されるからである。ところで、作者は、かなり多くの作品に、このような小動物をアクセント的に点描する傾向があり、それはたとえば「芥川竜之介王朝物全集」(岩波文庫)を見ても「偷



「盗」における青蠅、「簀の中」における馬蠅、などが挙げられるのである。そしてこの「きりぎりす」が、「偷盗」における青蠅のようには、必ずしもアクセントとしてうまくいっているとは言えないにしても、現代的感覚でそのまま「きりぎりす」とするのはおもしろくない。なお、私の述べたアクセントとしての「きりぎりす」が、いわゆるゆライトモチーフとしての「にきび」などと同一の技法であるかは今後検討したい。

⑬の表記は、⑬が原文通り仏語で、*Sentimentalisme* であるのに対し、⑭と⑮は英語表記に改め、⑯は書き出しのSが小文字であり、⑰は頭文字である。どうして仏語を英語にしたのか、そしてその場合にどうして頭文字にしたのかはわからない。仏語表現であるものを英語表現に改めることは、どちらも外国語ではあるけれども、大きな問題であって、高校一年生には英語の*Sentimentalism*の意味がわかるから注記も不必要としたのであるかもしれないが、そうでなくても勝手な理屈での改変は許されまい。⑯と⑰は注記に表記を変えたことを記すのが順当であると思われる。⑱が⑲を注に取り上げなかったのは英語表記に改めたからであろう。

⑲「築土」、⑳「疫病」、㉑「引剣」、㉒「辻風」の四例は、簡単な説明でもいいからどの教科書も注に取り上げるほうが望ましい語句である。

㉓の「頭身の毛も太る」は、

㉔ 異常な恐ろしさの形容。  
㉕ 非常に恐ろしい気持ちの形容。『今昔物語集』にしばしば用いられている。

と説明されている。このうち、㉔の『今昔物語集』にしばしば用

いられている。」という記述は——「しばしば」であるのかどうか、未調査なので従うとして——「羅生門」を読むのに不必要なあるいは邪魔になるものであるように思われる。作者は、「頭身の毛も太る」を、異常な恐怖の高まりの箇所効果的に引用した。「旧記の記者の語を借りれば」というのは、旧記の記者がしばしば用いる語——常套語的表現、慣用語——を借りればという意味ではなく、異常な恐怖の場面に遭遇したとき一回的な表現を借りればという意味であろう。そういう意味において、『今昔物語集』にしばしば用いられている。」は、下人が、死人の中にごめく老婆を目撃したときの異常な恐ろしさに対して水をさすことになってしまふのである。

『近代文学 芥川龍之介』の頭注は、「今昔物語集」の「頭身の毛も太る」場面を要約提示することによって、芥川がそれを的確に用いたことを裏付けるべき親切な注になっている。なお、㉔の「教授資料」には前掲書と同じく巻二十四の第二十を引いているが、どのように「しばしば」であるのかの説明はない。なお、㉔の注記なしは論外である。

㉕の「ひき(墓)」は、

㉖ ひきがえる。  
㉗ ヒキガエル。無尾目ヒキガエル科の一つ。大形で、主として陸上にすみ、昼は床下や草むらに隠れ、夕方などに出てきて蚊などを食べる。

と説明されている。表記は、㉘と㉙が漢字で「墓」、㉚がかなで「ひき」(㉚の本文で傍点を施しているのはこの語だけ)である。

さて、この㉘の説明はいかがであろうか。文部省の指示する教科書の注記に関する事項を知らないが、何の注記もない㉚が検定に合

格しているのであるから、まさか国語科の教科書に、こんな生物学的記述まで要求してはいないように思われる。生物学的記述と言つても、「大形で」という形態的説明を除くともつぱら生態的内容である。何年前まででは巻末に植物、動物の写真やさし絵などが付載されていたが、最近にはあまり見かけない。④の生態的説明は、さし絵などによる形態的描写の脱落した結果のものであろうか。

芥川は、「藝」をよく、たとえば「目の丸い、口の大きな、どこか藝の顔を思わせる、卑しげな女」（偷盗）のように、譬喩的に用いているが、「藝のつぶやくような声」のように「声」を形容したものはめずらしい。老婆の声はまず「鴉の鳴くような声」と表現され、老婆の心理に何らかの変化ないし動きがあつて、「藝のつぶやくような声」になるのである。では、「藝のつぶやくような声」とはどんな声か。一体「藝」はどんな声で鳴くのか。それは「鴉の鳴くような声」を理解するよりむずかしい問題である（一般からすの鳴き声を気味悪いとするが、現実のからすの鳴き声はのどかな感じであるから、その気味悪さはからすの黒い色調に暗示されたものであろう、それを芥川は漢字「鴉」で示した）。この「藝のつぶやくような声」というのも、「藝の鳴き声に似た、ほそぼそとした声」というよりも、「藝」という小動物の醜いイメージから想起される、低い、しわがれた声という意味であると思われる。そこで、ここは生態的説明よりも、形態的——視覚的・聴覚的——立場からの説明が望まれるのである。

なお、「羅生門」には、比況・譬喩の「ように」「ような」が十七例あり、そのうちの九例には小動物が用いられている。順に記すと、犬、猫、守宮、猿、虱、鶏、肉食鳥、鴉、そして藝である。

「羅生門」にはこれら譬喩に用いられる小動物以外に、蟋蟀、蜘蛛（の巣）、蛇、干し魚（蛇の切り身）が描かれていて、これらの異様なイメージが「羅生門」のテーマを支えているのである。そしてその中でも「藝のつぶやくような声」が最も難解なのである。

#### 4 一種が取り上げた項目

一種の教科書にだけ取り上げられているものは次の十例である。

②⑥下人 ②⑦洛中 ②⑧低徊 ②⑨局所 ③⑩逢着した ③⑪執拗く ③⑫四寸 ③⑬菜料（以上の八例は⑭） ③⑭されば ③⑮じゃて（以上の二例は⑯）

これらのうち、「下人」「洛中」「四寸」「菜料」の四例は現在通用しない名称であり長さの単位である。それらが⑯だけに注記されて他が取り上げていないというのは問題である。⑳や㉑がそれらを当然知っていることと扱つたのか、あるいは辞書を引くか、人に尋ねればよいと定めたのかははっきりしないが、どうも変である。

大体、注というものは、なければなくてもいいもので、ただあつた方が理解しやすからうという配慮に基づいて付けられるものである。なくてもかまわないが、教育的見地からは付けた方がよいというのであれば、その方針を徹底させる必要があるのであつて、必要なものはいくつかだけを注記するというのは適當ではない。㉒は「四寸」に「しすん」とルビを施した上で注記する。㉓にも「しすん」とルビがある。これは現代の若者が「ヨンスン」と誤読するのを避けた配慮である（蛇足ながら最近の数のかぞえかたは、いち、にい、さん、よん【し】）ごお、ろく、なな【しち】となり、「ななひきのこやぎ」なる児童書が出る）。そういうきめこまかい

配慮が注記においても望まれるのである。

「低徊」(㊥は「低回」と表記する)、「局所」「達着した」「執拗く」の四例は、古語であるとか、転じた意味で用いられているとかで理解の困難な、しかも主題へ迫るためには理解しておかなければならない語句である。そういう、わかりにくいのが内容理解の必要な語句を注で説明するという方針は、今後他の教科書でも採用することになると思われるし、またそうなることが望ましい。辞書は他の面で大いに活用できるからである。その際、「語弊がある」

「高をくくる」なども取り上げる必要があるし、また、そういう抽象的な語の意味にとどまらず、文論、文章論的な面からの注記も望まれるのである。たとえば、「羅生門」には二例の「全然」があり、それらは、「ここでは「全然」は打消をともなわぬ語として用いられている。」(㊦「学習指導の研究」と説かれ、「全然」は、どこにかかるかに注意する。)(㊧脚注欄の小設問)と示されている(その㊥の答えは「支配されている」にかかる。)(「教授資料」と記されている。)(㊨の「ここでは……」というのは、この用例だけ破格だというのであろうか。「全然」という陳述の副詞の最近の用いられたかたから見て、この説明では不足である。というのは、芥川は他の作品にもこの肯定文における「全然」を用いているのであって(たとえば「煙管」には、「煙管の地金を全然変更して」「彼等の豫想を、全然裏切つてしまふ事に、なつたのである」の二例がある)、そういう作者の個人的な用例は注意をうながす必要があると思われるのである(なお、芥川が肯定文に「全然」を用いたのは、あるいは漢文的表現の影響であるかもしれない。漢文においては「全然→肯定」の形は普通であるし、江戸時代の書にもそういう形

が見られるからである)。

文論、文章論的な面からの注記はまだ見られないが、その先駆とも目されるものに㊥の小設問がある。小設問は小問とも呼ばれ、脚注の欄に星印を付して、「注意する」「考える」「くらべてみる」などのことばで示される問題である。これは最近の教科書にしたいに見られるようになってきたが、㊥にはそれが二十四問あり、そのおよそ半数が、指示語、かかり受け、接続詞など文脈理解の問題である。まだそれらが綿密に検討された結果の問題であるとは言えず、なかには単なるドリル的なものも混じっているし、重要なものを見落してもいるが、別に「学習の手引き」論で扱うのでここでは先駆的なものとして取り上げるとどめる。

次に、㊥の「されば」「じゃて」の注記であるが、これらももちろんないよりある方がよい。しかし老婆のことばには、「じゃて」と同じ接続詞で、ただ逆接の意の「じゃが」がその前にあり、接続詞ではないが、「飢え死にをするのじゃて」と「じゃて」が用いられている。接続詞の「じゃて」を「そうなので」と説明するのなら、同じ接続詞の「じゃが」、付属語の「じゃて」のかかわりにおいて説明するのが、ことばへの目を養うことになるであろう。

㊥の〔研究の手引きB〕の「2」には、

老婆の会話のことばから、特色のある言い方を抜き出し、普通の言い方に直せ。さらに、作者は、なぜ老婆にこういうことばを使わせたのか、考えよ。

という設問があり、それは単に「されば」「じゃて」の意味にとどまらず、位層語の問題にかかわり、またこの作品における表現の問題になつているのである。

作者は大正四年に「羅生門」を発表し、その後もその表現を何度か書き改めた。このことは、とりわけ最後の一文においてよく知られていることであるが、この老婆のことはまた大きく書き改められているのである。大正六年に刊行された第一創作集「羅生門」では、まだ、老婆のことは間接話法的に、つまり作者が概略的に書くといふかたちで示し、従つて、「されば」が「だから」、「せねば」が「しなれば」、「じゃて」が「だからである」というようになっている。そこで統きの「老婆は大体こんな意味のことを言つた」が生きていたのであるが、大正十一年刊行の「沙羅の花」に収めるときに、そういう間接話法的な表現から直接話法へと書き改められ、京都の庶民層のことはなつたのである。そういう意味において、これら「じゃて」、「されば」などには作者の表現意図が十分にこめられているので、㊦の設問が當を得たものになっているのである。

おわりに

教材が単なる教科書の本文だけでなく、注記、作者概説、教材未設問などの総合したものであるということから、注記を中心とした教材研究を試みてきたが、当然それは設問と本文表記、あるいは主題などの問題ともかわり合つていたので、次にはそれらの総合的な検討が要求されてくる。

現行の教科書の注記を中心に見てきたのでそれら教科書に対する批判のことも随所に出でしまつたが、私のこのつたない論の目的がそこにあるのではない。注記の現状を知ることとは、とりもなおさずその作品の読み現状を見るということ、私はそれらを比較対照することによつて随分と教えられることもあつた。

私はいまだに注記に関する論を知らない。あるいはすでに綿密に検討されているものがあるかもしれない。そして、私のこの文章を再構成すればあるいは注記論になるかとも思われるが、これは教材研究の一環としてのものであるので羅列的に思いついたことを記すまににした。以上の中には、私の至らないところも、思いあがつている箇所も多いかと思うが、御容赦とともに御教示を賜われればこの上ない幸いである。

〈参考文献〉（教科書・学習指導書を除く）

- 1 近代文学 芥川龍之介 吉田精一氏編著 有精堂 38・5
- 2 注釈大系 「羅生門」(「帝国文学」大正四年十一月号)
- 3 新選名著複刻全集近代文学館「羅生門」(大正六年阿蘭陀書房刊 行の複刻本) 45・8
- 4 「沙羅の花」 改造社 大正十一年八月
- 5 芥川龍之介(近代文学鑑賞講座第十一卷) 吉田精一氏編 角川書店 33・6

(以上のうち2と4は国会図書館蔵本の複写である)

(愛知教育大学)